

植物随想

ブナ

笹川 通博

街は異様な賑わいだ。若者達は色とりどりのしょう洒な服で身を飾り、黒髪を茶や赤で染め、わけても、娘達の毒々しい口紅の色。耳にはヘッドホン、鳥の歌は聞えない。手に手に菓子、原料は何なの。昼間というのに電気の照明が降り注ぎ、どこからでも様々な音があふれ、錯綜する。季節を感じさせるものといったら、まるで病気にでもかかっているようにやせた街路樹と、店先を飾る広告の文句やセルロイド製の木の葉。車の走る音、目まぐるしい信号の点滅、人の群れの行き来。流されて行く、何も考えられない。ここは一体、どこの惑星であろうか。

口々に、「自然」とともに生きることを唱えながらも、文明に溺れた生活を送っている。この大量の食品、服、紙、車、電化製品、そしてゴミ。水が濁る、空気が汚れる、森がなくなる。知らないはずはない。しかし、病的にまで清潔さに固執し、自らは手を汚さず、世界を搾取し続けているのだ。しかも、何と無知なことよ。テレビやラジオや書籍や、様々な情報伝達手段は、うんざりするほど大量の知識を伝えてくれるが、本当に必要なもの、本当に救いとなるものは、一体どれ。そして、何をすればいいの。人や他の生きもの達が次々と死んでいく。やがて人類は滅びるのだと、平気な顔をして言える。でも、考えなくてはいけない。足早に人込みを抜け、街を抜け、そう、森へ行こう。

くりかえし、くりかえし、いつもの問えかけで頭を苦しめ、森を歩く。ここは、ブナの森だ。意外と光のあるのは、林床が開けているからだ。血の通わぬ木々の、何と暖かく親しげなことよ。植物と、動物と、菌類と、様々であることを包容し、しかし、この緊



刈羽 黒姫山ブナ林 '81年 6月7日張、自らもかろうじて立っている。今年のブナは豊作だ。枝先には、刺で包まれた実がたくさんついている。大昔、人はこれを食べたのだそうだ。ブナの属名「Fagus」は、「食べる」という言葉に由来する。しかし、今はただ珍しげに眺めるしか能がない。もう食べることはないの、余程まずいものなのだろう。「ブナ帯文化」というのがある。日本の文化の主流は、稲作など、照葉樹林帯で育まれたものとされる。しかし、東日本の文化は、照葉樹林帯の文化というよりもむしろ、ブナ帯によって育まれたものという。その文化は、北方のものとして、狩猟、採取、ソバやヒエの栽培など、生産性は低かったであろう。いずれにしても、東日本に住む者にとって、ブナの森は母なるものである。「自然」の中での、食うか食われるかの生活、そこから、文化が育まれてきたのだ。

森の小道を登りながら、異国の物語を思い起す。世界は巨大な木の幹にあるのだ。その木は虚空に根つき、その葉は雲、その実は星。神々は、天に巨大な城を築き、そこを住みかとし、地下では、小人たちが暗躍する。そんな

時代、森の奥深く、一人の男が生まれた。彼は英雄になるよう、神々によって運命づけられていた。彼には、大蛇を退治するという使命があった。その大蛇は、手にしたものが世界を支配できるという宝物を、飲み込んでいたのである。聖なる剣で大蛇を倒した時、その返り血を浴びて彼は不死身となった。同時に、鳥の言葉が分かるようになり、自分の次の冒険を知らされた。しかし、その後の彼を待っていた悲劇。彼が手にした宝物には、所有者は滅ぶという呪いがかけられていた。はたして、大蛇の血を浴びた時、一枚の木の葉が、彼の肩にはあったのだ。

見よ、体にまとわる羽虫の群れを。まるで痛みを感じないもののように、打たれても打たれても血を吸おうとする。美しくさえずっている小鳥達は、虫を食らう。動物達は倒れると、草木に吸われる。草木はまた、惜しみのないもののように、動物達に奪われる。森は、その身の内に生も死も宿している。不死身などありはしない。必ず死に、その体は微塵となり、さらに循環する。しかし、人はそこから逃げた。あるいは、冒険の旅に出た。多くの困難に打ち勝った。はたして、世界をその手にするのであろうか。今後の危機を、どうやって解決するのか。パンドラの箱は、開かれつつある。おそらくは希望だけが、またしてもその内に残るであろう。その希望を、どこにつなげばいいのか。絶え間のない問いかけ。しかし、やがて沈黙が、恐ろしい静けさが来るのかもしれない。

やがて。

森を抜け、尾根に出る。空が見える。美しい光だ。ブナは人の背丈ほどの高さだ。鳥の声は遠く、日は既に傾いている。光あるうちに、何かを、残したいと思う。(新潟向陽高等学校)